

理化学研究所と連携協力協定を締結しました。

(平成 21 年 4 月 7 日)

日経産業新聞(平成21年4月7日 11面)	
<p>理研の NMR 阪大などに移設 3 機関と協力協定</p> <p>理化学研究所は六日、たんぱく質の構造解析などに使われている NMR (核磁気共鳴) 装置を、大阪大学と京都大学、サントリー生物有機科学研究所(大阪府島本町)にそれぞれ一台ずつ移設すると発表した。理研はこの三研究機関と連携協力協定を締結する。</p>	<p>理研は国の大規模研究プロジェクトである「タンパク 3000」の一環として、横浜研究所に NMR 装置四十台を整備した。今回移設するのはそのうちの三台。阪大蛋白質(たんぱく)質研究所には八〇〇メガは百万</p> <p>学研究所とサントリー生物有機科学研究所には六〇〇メガの装置を移設する。今年夏から秋にかけて稼働する予定。</p>

当財団は、広く学術研究支援を行ってきましたが、NMR による構造解析については 1960 年代から解析と機能の提供による大学等の研究支援を行ってきました。今般、独立行政法人理化学研究所(理研)と連携協定を行い、今後もより一層の学術研究支援を推進します。

当財団の研究所は、1965 年に 60 MHz を設置したのを始めとして各時代における最新の NMR 装置をいち早く導入してきました。そして、それらの NMR を用いて、大学等の学術研究の解析支援を行い、主に日本の天然物有機科学の発展に貢献してきました。今回の協定では、理研の NMR 施設の外部利用拡大に協力する形で、2009 年 4 月 7 日に理研と連携協力協定を調印し、理研の 600 MHz NMR 装置を当研究所に移設することになりました(本年 7 月稼働予定)。

当研究所は、移設される NMR 装置に、理研のタンパク 3000 で用いられたタンパク質の立体構造決定法を整備し、その技術を近畿圏で活用できる拠点を提供する予定です。あわせて、当研究所のタンパク質の作用メカニズムの解明などに求められる最新の NMR 解析法も整備し、従来から行ってきた学術研究支援を推進します。

また必要にあわせて、これらの NMR 解析技術を大学院生などの教育に協力する予定です。



装置を受け入れる NMR 室